

長野県産シダ植物の新産地 (7)

上野 勝典*・上野 由貴枝*

New localities of some pteridophytes in Nagano Prefecture (7)

Katsunori Ueno and Yukie Ueno

ヒメハナワラビ (ハナヤスリ科)

Botrychium lunaria

・木曽町日義 1400 m 2012 年 8 月 4 日
NAC163727

溪流脇の急斜面の針葉樹林下を歩いていたときに、2 株がまとまって出ているのを見つけた。ヒメハナワラビは県内では亜高山から高山の比較的日当たりの良い草地に生えるとされているが、標高 1000 m 程度の薄暗い針葉樹林下で見つかることもある。木曽谷では、1929 年に上松町の中央アルプス側で横内氏によって採られた記録がある (長野県植物誌資料集作成委員会 2005)。

チチブホラゴケ (コケシノブ科)

Crepidomanes schmidtianum 写真 1

・大滝村瀬戸川 900 m 2012 年 9 月 29 日
NAC163728

瀬戸川沿いの急な岩場を観察しているとき、大きな岩の数か所に本種が群生しているのを見つけた。ハイホラゴケやヒメハイホラゴケと比較すると小さく、また胞子嚢群は包膜がコップ状で周辺が反り返る特徴がある。胞子嚢群をたくさんつけているのをあまり見たことが無かったが、ここではよく付けていたので、包膜を観察することができた。周囲にはホソバコケシノブが多く見られ、ときおりコウヤコケシノブも生育していた。木曽谷では、塩尻市の釜の沢や奈良井川 (上野・上野 2006)、および木曽町 (上野・上野 2011) で観察した。県内ではその他南アルプス周辺で見られる。

ハイホラゴケ (コケシノブ科)

Crepidomanes birmanicum

・飯田市南信濃和田 400 m 2012 年 10 月 7 日
NAC163738

スギ林下の湿った岩場に着生して生育していた。



写真 1 チチブホラゴケ 大滝村瀬戸川
2012 年 9 月 29 日

包膜の形に変化が大きく、ときに大きくてやや切れこみのあるものも多く見られた。南信では、アオホラゴケは比較的多く見られるものの、ハイホラゴケを見ることはほとんどない。ハイホラゴケは以前天龍村 (上野・上野 2006)、根羽村 (上野・上野 2011) で観察したことがある。

オオバノイノモトソウ (イノモトソウ科)

Pteris cretica

・塩尻市宗賀 700 m 2011 年 11 月 27 日

奈良井川沿いのスギ林下に、幼株が一株のみで生育していた。まだ胞子嚢群はつけていなかった。周囲にはオオクジャクシダやツヤナシイノデが多かった。オオバノイノモトソウは、イノモトソウに良く似ているが、より大型で、軸には翼がつかず、羽片の数が多い。また、葉脈が片縁に達するなどの特徴

* 上野勝典・上野由貴枝 〒399-0011 松本市寿北 2-2-38



写真2 オオバナハチジョウシダ 飯田市
南信濃和田 2012年10月7日



写真3 トキワトラノオ 伊那市戸台黒川
2012年8月16日



写真4 オオカナワラビ 飯田市南信濃和田
2012年10月7日



写真5 キヨスミヒメワラビ 塩尻市宗賀
2011年11月27日



写真6 ウスヒメワラビモドキ 大鹿村鹿塩
2011年7月31日

から区別できる。オオバノイノモトソウは暖地性シダとされ、伊那谷から南信にかけて多く見られるが、木曽谷では旧櫛川村、開田高原での記録がある（長野県植物誌資料集作成委員会 2005）ものの、見ることはほとんどない。観察した場所は以前からときおり見ていた場所なので、おそらく近年進出してきたものと思われる。

オオバノハチジョウシダ（イノモトソウ科）

Pteris excels 写真 2

- ・飯田市南信濃和田 500 m 2012 年 10 月 7 日 NAC163739
- ・天龍村平岡 350 m 2012 年 11 月 25 日 NAC163733

飯田市では、溪流脇の流れのかかりそうなところに 2 株ほどが生育していた。一株はかなり大きくなっていたが、まだ胞子嚢群はつけていなかった。一方の天龍村では、林道脇の工事後の法面に一株のみで生育していた。工事後の法面ではあったが、シダの生育環境には良いようで、シダ植物が多数繁茂していた。以前、天龍村の別の場所で観察したことがあったが、そこでの生育状態は極めて悪かったため、標本を採ることができなかった（上野・上野 2006）。オオバノハチジョウシダは暖地性の中型のシダで、水の流れに近い湿ったところで見かける。県内では、これまで小谷村、泰阜村で記録があった（長野県 2002）。

トキワトラノオ（チャセンシダ科）

Asplenium pekinense 写真 3

- ・伊那市戸台黒川 1000 m 2012 年 8 月 16 日 NAC163729

道路脇の苔むした石垣に大きなトキワトラノオが着生していた。周囲にはイワトラノオやクモノスシダなどが見られた。トキワトラノオは、ややコバノヒノキシダに似ており、しかも混生していることもあることから、見逃されていることも多いように思われる。最下羽片が扇形をしており、葉質も厚いことなどからコバノヒノキシダと区別できる。

オクタマシダ（チャセンシダ科）

Asplenium pseudowilfordii

- ・飯田市南信濃和田 400 m 2012 年 10 月 7 日 NAC163734

スギ林内の大きな岩場に、カタヒバに混じってオクタマシダが着生していた。天龍村周辺ではときお

り見かけるものの、県南部ではそのほか泰阜村での記録しかなかった（長野県 2002）が、阿南町でも見ついている（上野・上野 2006）。「信州のシダ」（大塚 2004）では、南信濃産とされる写真が掲載されている。暖地性の着生シダで、湿った岩場や樹木の幹で見つかる。

オオカナワラビ（オシダ科）

Arachniodes amabilis 写真 4

- ・飯田市南信濃和田 400 m 2012 年 10 月 7 日 NAC163742

スギ林内の岩場の縁に沿うように、オオカナワラビが生育していた。頂羽片がはっきりする点でハカタシダによく似ているが、側羽片が 5～10 対と多く、より大型になる。また、ハカタシダは胞子嚢群が軸と縁の中間に付くが、オオカナワラビでは辺縁に付く特徴がある。ハカタシダは天龍村周辺で見かけるものの、オオカナワラビを見ることはほとんどない。

イワヘゴ（オシダ科）

Dryopteris atrata

- ・売木村旭 800 m 2011 年 10 月 1 日 NAC 161920

溪流脇に一株が生育していた。イワヘゴはオオクジャクシダによく似ているが、鱗片が黒く、胞子嚢群がやや軸寄りに付き、また葉面の色がより濃い緑色で、葉脈のへこみが少ないなどの違いがある。最近、天龍村、南木曽村、根羽村（上野・上野 2009）の県南部以外にも、塩尻市（上野・上野 2007）や長野市（竹重 2009）でも見つかるなど、あちこちで見ついていることから、分布が県内で広がっている可能性がある。

カタイノデ（オシダ科）

Polystichum makinoe

- ・辰野町小横川 780 m 2011 年 4 月 24 日 NAC 161926
- ・飯田市南信濃南和田 350 m 2012 年 4 月 29 日 NAC163726
- ・飯田市南信濃和田 400 m 2012 年 10 月 7 日 NAC163740

辰野町では、畑脇のやや日当たりの良い法面に数株が生育していた。草刈りによって時折葉が切られている形跡があったものの、良好な生育状態だった。また、飯田市南信濃のスギ林では数か所で多くのカ

タイノデが見られた。カタノデは近年、長野県内の各地で見つかり（上野・上野 2009、竹重 2009）、急速に分布が広がっているように思われる。塩尻市の自生地では毎年観察を続けており、生育状態は特に悪化することなく、良好な状態を保っている。

チャボイノデ（オシダ科）

Polystichum igaense

・泰阜村万古溪谷 400 m 2011 年 7 月 13 日
NAC 161911

溪流脇のスギ林下縁で、やや日当たりの良い所に数株が生育していた。チャボイノデは県南部に分布している暖地性のシダで、小型のイノデモドキによく似ている。イノデモドキと比較して、胞子嚢群がより辺縁に付き、またより小さい。鱗片の縁はイノデモドキほどには切れこまず、ねじれる傾向が強い。近くでは飯田市南信濃、天龍村、阿南町などで観察している。

サイゴクイノデ（オシダ科）

Polystichum pseudomakinoi

・三郷村小倉 800 m 2012 年 4 月 21 日
NAC163731

スギ林内の林道脇に生育しているのを見つけた。サイゴクイノデは葉面に光沢が無く、葉柄基部の鱗片は黒褐色で、胞子嚢群が耳片に優先して縁寄りに付く特徴があり、イノデ類の中ではわかりやすい。県南部を中心に分布する暖地性のシダだが、近年松本市や塩尻市、辰野市、小布施町でも見つかり（上野・上野 2011、竹重 2009）、近年県内でも広く見られるようになっている。

キヨスミヒメワラビ（オシダ科）

Ctenitis maximowicziana 写真 5

・塩尻市宗賀 700 m 2012 年 11 月 27 日
NAC161927

奈良井川沿いの竹林の縁に一株のみが生育しているのを確認した。2007 年ころまだ幼株で見つけたものが（上野・上野 2008）、今回見つけたときにはすでに成長して胞子嚢群をつけるまでになっていた。キヨスミヒメワラビは県南部ではスギ林下で比較的普通に見られる中型のシダで、若いころは白い半透明の美しい鱗片を密生する。

ミゾシダ（ヒメシダ科）

Stegnuogramma pozaii subsp. *mollissima*

・塩尻市釜の沢 850 m 2012 年 11 月 18 日
NAC163737

林道脇に数株が生育していた。この場所は以前から何度も来ているので、おそらく近年進出してきたものと思われる。ミゾシダはやや湿ったところで比較的普通に見られるシダではあるが、県中部ではあまり見られなかった。近年太平洋側と日本海側とで 2 タイプに分けるという見方がされている。

シケチシダ（イワデンダ科）

Cornopteris decurrentialata

・塩尻市賛川 850m 2011 年 11 月 13 日
NAC161921

塩尻市では多くの暖地性シダが見つかったが、シケチシダも暖地性シダで、北向きの溪流脇スギ林下に大きな株を含めた小群落が見られた。周辺ではそのほか、イワヒメワラビ、ゲジゲジシダ、オオヒメワラビ、ヤワラシダなどの暖地性シダも多く見られた。

ウスヒメワラビモドキ（イワデンダ科）

Acystopteris japonica var. *taiwaniana* 写真 6

・大鹿村鹿塩 1700 m 2011 年 7 月 31 日
NAC 161919

日本シダの会第 57 回全国大会（松本市 2008 年 8 月）にて、宮崎弘規氏から、岐阜県から見出されたシダで、ウスヒメワラビモドキ *Acystopteris japonica* var. *taiwaniana* Tagawa が、日本新産として紹介された。その特徴は中軸がウスヒメワラビは紫色になるが、ウスヒメワラビモドキは褐色で、葉質はやや硬く、包膜の縁に腺毛があるとされ、生育地は暖地性のウスヒメワラビとは異なり、山地帯上部から亜高山帯下部の標高の高いところとされる。「日本の野生植物 シダ」（岩槻 1992）では、台湾のものをウスヒメワラビモドキとして区別する考え方もある、と記載されている。10 年ほど前に大鹿村と乗鞍岳の岐阜県側の亜高山帯で暖地性とされるウスヒメワラビの群生地があることに気がついており、不思議に思っていたが、その他でも県内で標高の高いところの数か所でウスヒメワラビの記録がある（長野県植物誌資料集作成委員会 2005）。また、「木曾谷の植物」（奥原 1971）には、長野県のウスヒメワラビについて、「これら北部や中部のものは葉柄下部の一部だけは多少紫褐色であるが、葉柄の大部分と葉軸は淡緑色でウスヒメワラビとは別物のよ

うな感を受ける。」と記載されており、上記ウスヒメワラミモドキの特徴と一致している。そこで、奥原氏のウスヒメワラビの採集地の中で、もっとも標高の高い開田高原の月夜沢の標高 1400 m 付近に、2 回ほど出向いてウスヒメワラビを探したが、シダの種類は非常に少なく見つかることはできなかった。ほとんどがカラマツの植林地となっており、林下はササで埋め尽くされており、おそらく当時とは環境がまったく変わってしまったものと思われる。

そこで、以前確認していた大鹿村の自生地に再来し、ウスヒメワラビを観察したところ、葉柄の色は褐色で、葉質が硬く、また包膜の縁に腺毛を確認することができたため、ウスヒメワラビモドキとした。現地では密生して大きな群落を作っており、冷温帯性のシラネワラビと競うように混生していた。そのほかミヤマメシダ、ミヤマウラボシ、ヒメスギランなどシダ植物の種類が多く見られた。県内ではウスヒメワラビは県南部に多く、南木曽町の田立の滝付近では標高 1000 m 付近まで連続的にウスヒメワラビが見られるものの、この付近のものは典型的なウスヒメワラビであった。また、塩尻市釜の沢にもウスヒメワラビが多く、形態的にはウスヒメワラビであったが、包膜を観察すると腺毛が見られ、ウスヒメワラビモドキとの中間型と考えられた。海老原ら (2012) は遺伝子の解析からウスヒメワラビモドキとウスヒメワラビの中間型が存在し、それらの捻性が落ちないことから、ウスヒメワラビモドキはウスヒメワラビの変異の範囲だろう、と結論している。したがって、ウスヒメワラビモドキを種として区別するには難があるものの、自生環境や形態にはっきりした特徴があることから、ここでは区別しておくことにした。

オオクボシダ (ヒメウラボシ科)

Xiphopteris okuboi

・根羽村小戸名 700 m 2011 年 10 月 10 日
NAC 161913

川沿いの苔むした岩場に数株のオオクボシダが着生していた。本種は暖地性のシダではあるが、比較的涼しいところでよく見かけ、ややまとまって見られることが多い。

謝辞

シダ植物の同定ならびに本報告の作成にあたり、貴重な助言をいただきました長野県環境保全研究所 & ハーバリウム (NAC) の大塚孝一氏に心より感謝の意を表します。ウスヒメワラビモドキについて、最新の情報をご教示いただきました国立科学博物館の海老原淳氏に心より感謝の意を表します。

引用文献

- 岩槻邦男 (1992) 日本の野生植物 シダ. 平凡社.
大塚孝一 (2004) 信州のシダ. ほおずき書籍.
奥原弘人 (1971) 木曽谷の植物. 木曽教育会.
長野県 (2002) 長野県版レッドデータブック維管束植物編.
長野県植物誌資料集作成委員会 (2005) CD-ROM 長野県植物誌資料集 (普及版).
上野勝典・上野由貴枝 (2006) 長野県産シダ植物の新産地 (3). 長野県植物研究会誌 39: 123-127.
上野勝典・上野由貴枝 (2007) 長野県産シダ植物の新産地 (4). 長野県植物研究会誌 40: 237-240.
上野勝典・上野由貴枝 (2008) 塩尻市の暖地性シダとカタイノデの生育状況. 長野県植物研究会誌 41: 19-23.
上野勝典・上野由貴枝 (2009) 長野県産シダ植物の新産地 (5). 長野県植物研究会誌 42: 71-74.
上野勝典・上野由貴枝 (2011) 長野県産シダ植物の新産地 (6). 長野県植物研究会誌 44: 37-40.
海老原淳・松本定・宮崎弘規 (2012) 日本で発見されたウスヒメワラビモドキとその正体. 日本植物分類学会 11 回大会 (大阪) 研究発表要旨集: 71.
竹重聡 (2009) 千曲川右岸スギ林のシダ新産地の環境特性～イノデ類とイワヘゴの記録経緯と分布拡大を考える～. 長野県植物研究会誌 42: 51-58.